

256 甲状腺癌転移症例の血中サイログロブリン値測定の臨床的意義—予後とI-131集積について—
勝山直文、堀川 歩、大田 豊、諸見里秀和、山口慶一郎、中野政雄(琉大・放)

I-131治療を20症例の甲状腺癌転移巣に対し、計55回施行した。症例は男5例、女15例である。組織型は乳頭状腺癌16例、濾胞状腺癌4例である。血中サイログロブリン(Tg)の測定は二抗体法(栄研RIA)にて行った。Tg抗体陽性は1例のみであった。全例において甲状腺ホルモン投与中のTg値と比し、I-131治療時のTg値は有意に高かった。また全例血中TSH値も上昇を認めた。転移巣が小さく、かつ転移数の少ない3例では甲状腺ホルモン投与後、Tg値は10以下であった。死亡3例、増悪3例では甲状腺ホルモン投与中でもTg値は、不変または軽微増悪群のTg値と比し高かった。またI-131集積が強い症例ではI-131治療中のTg値は高かった。

257 甲状腺癌再発に対する各種画像診断、血清学的検査および臨床所見による診断とその意義について
木原鴻洋、村上真也、渡辺洋宇(金大 一外)、川上健吾、品川 誠、牛島 聡、中泉治雄(公立能登総合 外)、石川義鷹、佐々木恵子(金沢医大 病理)、谷口 充、油野民雄(金大 核)

甲状腺分化癌の再発は稀ではあるが、再発の早期診断および治療は極めて困難を伴うことが多い。過去10年間にわたる公立能登総合病院外科での甲状腺手術件数169例中、癌の再発を疑って再手術を施行したのは8例であった。そのうち病理組織学的に再発を認めたのは2例であり、残り6例はいずれも癌陰性であった。そこで今回これら8症例での再手術前の核医学検査、CT、超音波、X線の各画像所見、血清サイログロブリン値、並びに臨床所見と、再手術後の病理組織学的所見とを対比し、各種検査の臨床的意義とその問題点について検討した。

258 甲状腺癌術後の¹³¹I大量投与による内部照射に伴う唾液腺機能障害について

木原鴻洋、村上真也、渡辺洋宇(金大 一外)、川上健吾、品川 誠、牛島 聡、中泉治雄(公立能登総合 外)、坂本 守(同 耳鼻)、石川義鷹、佐々木恵子(金沢医大 病理)、谷口 充、油野民雄(金大 核)

甲状腺癌術後に¹³¹I大量投与による内部照射を、昭和57年1月より平成3年12月までの10年間に、計18例公立能登総合病院で施行した。これら18例では、ほぼ全例に急性または慢性の唾液腺機能障害が認められた。今回、血清学的検査として唾液腺由来血清アマラーゼ値測定、生検、並びに^{99m}Tc-pertechnetate 370MBq投与による唾液腺シンチグラフィ(Schallのclass I~Nの4段階分類による定性的評価および時間放射能曲線から求めた定量的評価を施行)により唾液腺の変化を総合的に判定し、その結果極めて有用な知見が得られたので報告する。

259 維持血液透析中の甲状腺癌術後患者における放射性ヨード治療の経験
横山邦彦、谷口 充、道岸隆敏、秀毛範至、油野民雄、利波紀久、久田欣一(金沢大学核医学科)

慢性腎不全のため10年以上の維持透析歴を有する54歳女性の再発甲状腺癌術後症例に、放射性ヨード(I-131)内部照射治療を行った経験を報告する。甲状腺全摘術後に頸部リンパ節再発巣の廓清が施行され、ablationを目的にI-131治療を行った。維持透析中に治療と同一スケジュールでトレーサスタディを行い、全身被曝線量を推定し、投与量ならびに投与と透析のタイミングを決定した。血液ろ過(hemofiltration, HF)を行い、汚染した透析液が少量で済む様に配慮した。従事者の被曝は通常の治療と同程度であり、HF装置の汚染はバックグラウンド放射能レベルであった。以上より、血液透析中の患者に対しても、安全にI-131治療が実施可能であった。

260 甲状腺癌転移症例の集学的治療後の評価における²⁰¹Tlおよび骨シンチグラフィの有用性
久保田昌宏、津田隆俊、森田和夫(札医大 放)

甲状腺分化癌は肺、骨などの血行性転移が高率であるが、転移をきたした場合でも、他の癌に比べてその生命予後は長い。その転移病巣の治療法として放射性ヨード療法が最も有効な手段である。今回、骨転移、肺転移にともなう症状を有する甲状腺分化癌9症例に対して放射性ヨード療法および動注、動脈塞栓療法を施行し、治療前後での²⁰¹Tl、骨シンチグラムおよびCT、MR像を比較した。骨three phaseシンチグラフィは血管撮影と比して腫瘍のvascularityを反映し、²⁰¹Tlシンチグラムにおける腫瘍集積度は腫瘍のviabilityの判定に有用であると考えられた。

261 ²⁰¹Tlシンチによる甲状腺腫の良悪性診断の再評価
小泉 満、田口英二、野村利治、後藤政文、亘理 勉(獨医大、放)

甲状腺の腫瘍性病変の良悪性の診断に²⁰¹Tlによるearlyおよびdelayedのイメージが用いられている。再発例ではその有用性が認められているが、原発のものでは評価がまちまちである。当院で甲状腺²⁰¹Tlシンチを施行した700症例のうち組織診断の確定した結節性病変(悪性101例、良性145例)につき視覚的評価(Ochi, Cancer, 236, 1982)を行った。悪性病変に対する感受性は74%、特異性58%であった。潜在癌を除くと感受性は87%となった。疑陰性例は潜在癌、1.5cm以下の腫瘍および壊死、出血が高度なものであった。²⁰¹Tlシンチは、甲状腺悪性病変に対して1.5cmを超えるものに対しては感度の高い検査であるが、delayedイメージを加えても特異性に問題があると考えられた。